

## 「信」の醸成

この世に存在する何物についても、私達は日々得られる情報の中から、常にその対象について知覚観察し、何がしかの分析を行っています。

幼い子供でも、その対象との関係を築く過程で、自らが触れる事象や情報を活用し、それがどのような実態であり、どのような影響を及ぼすかを推し測り、無意識のうちにも優劣を付けたり、選別や格付けを行ったりします。

それは、私達が生存している間、絶え間なく繰り返される、いわば、人間の本能とも言えるものです。

その結果として、その人の中で醸成され成立するものを「アイデンティティー」と言います。

単なるイメージ（全体的な印象）とは異なる、この「アイデンティティー」の重要性を、私達は生きていく上で、十分に理解しておかなければなりません。

特に事業経営においては欠く事の出来ない要諦です。

近年、グローバルに展開される経済社会の中で、かつての日本の優位性は崩れ、急速にその競争力は失われつつあります。

彼の高度成長の時代には、特別な戦略や戦術を用いなくても、需要の増加に対応するだけで、誰もがその恩恵に浴する事が出来ました。しかし、努力する事なく資産が増え続けるという状況は崩壊し、今はむしろ、物事が正常に戻りつつあるその過程であるといえます。

厳しいデフレ経済の中で、企業間の競争は熾烈を極め、正に生き残りをかけた戦いが展開されています。

それでも一方には、真に公正な競争を好まない、成長期に培われた甘いもたれあいの体質が、容易に改善されにくいという現状もあります。

企業の倒産や、リストラによる失業の不安の中に居ても、多くの人達は日常の行為が常に競争の場であるという側面や、それによって企業の盛衰が決定付けられる事を、自身の問題として理解し得ていないのが、実態かもしれません。

私達の生きる世界は、競争を原理とした資本主義の社会であり、競争の原理は人々の向上心を煽ることで社会に働きかけ、世界をめまぐるしく変化させています。

又、人類の繁栄は人間の欲望と共にあり、その論理において人間の能力は無限に開かれています。自由経済下での競争は、その論理を良く理解する事が肝要です。

住宅建築業の特徴は、完成した建物は全て街角に置かれ、幾十年もの間、人々の目にさらされるということです。

人々は、それを目の当たりにして、何かを感じる。それは我が社への率直な評価となり、次第次第にそのイメージは浸透していきます。

街角に置かれている一つひとつの建物は、お客様の財産であり、街の財産であり、そしてある意味、我が社の財産でもある……。よって、私達の生み出す建物は、その存在価値において他社との明確な差別化を図り、社会に必要不可欠な存在であり続けなければなりません。このことを強く意識し、実践し続けることこそが長い繁栄の礎となるのです。

私達は建物の構造やデザインや居住性、環境への配慮等、諸々の事柄に精通し、「人が豊かに生き活きと生きる為の、機能的で美しく居心地のいい住まいづくり」に情熱を持って取り組み、「自らが納得しなければ供給しない！」というほどの強い信念を持たなければなりません。

住宅を建てるという事業は、お客様にとって、およそ人生で最も大きな買い物であり、その結果の良し悪しは、お客様の人生観を変えてしまうほどの力を持ちます。

楽しいはずの住宅建築が、苦々しい思い出となってお客様の中に残る事ほど不幸なことはありません。

住まいづくりは、お客様にとっては、期待とともに不安も大きく、時にはつくり手に対する疑念を抱かれる事もあるかも知れません。私達はあらゆる状況を想定し、お客様にとっていつも気持ちのいい状態をつくる事を心がけ、お客様の「心のケア」に最大の注意を払わなければなりません。

たとえそれを、お客様側の間違いだ、と感じても「お客様のミスは我々のミスだ!」と思える程の寛容さを持って対処することが、「徳」であり、好意を持たれる源泉です。

大切な事は、「全てのお客様に」住まいづくりを楽しんで頂きたいという気持ちを強く持つことです。

物事の是非を理論的に解明し、正しいとか正しくないとかだけを判断の規範にする事は、対お客様との折衝では重要ではありません。理屈にかなう筋の通った話でも、情緒、信条、人情等、さまざまな要素を持ち合わせた人間には、通じない正解もあるのです。

そして何よりも、嫌いな人の言うことは聞きたくないのは、人間の本性なのです。

よって私達は、自らの態度や言葉を磨き、身だしなみを正し、心の修養に務め、「お客様に好かれる事、強く好かれる事、永く好かれる事」を自らに課し、敬愛の念を抱いて接する事を本分とします。

又、私達は元来、「環境にやさしく」とか、「人にやさしく」などの思いやりは持っており、このことは取り立てて言及する程の事ではありません。ただ、私達は自分の予期しない事で周囲に負担を強いていながら、その事に気付かない場合があるかもしれません。

「環境にやさしい」とは、周囲の事物に対する思いやりのある行為と言い替える事も出来ます。身近な例として、現場における、騒音、ゴミ、迷惑駐車、挨拶等、無意識で気付かないという事が、時として相手に思いやりの無い行為と受け取られ、批判の対象とされる事は、予測される事であり、十分に配慮しなければなりません。

多くの人達に関心を持たれ注目をされる事は、企業として喜ばしい事であり、繁栄には欠かせない要素ですが、私達の日々の行いはその関心の高さに比例して伝わり、その印象は私達の手を離れ、全ては客観的視点に委ねられます。

企業は、社会という大きな組織に組み込まれて機能します。絶えず社会との調和を忘れないことです。企業が自己の利益だけを求めていけば、倫理性が失われたり、環境対策がおろそかになっていきます。社会との調和が不十分な企業は、企業イメージを悪くするだけでなく、誇りを持たない人の集合体となり、やがては企業そのものを蝕んでしまいます。

私達は、社会から歓迎され、尊敬されるような存在でありたいと思います。

私達を取りまく、社会環境、自然環境が共に荒廃の危機にある現在、私達が自発的かつ積極的にこの保全や育成に取り組むことは当然の事であり、社会人としての役割を果たす事になるのです。

「環境への思いやりを深め、率先してこれに取り組む」ことは、いつでも、どこでも、実践出来ることであり、一人ひとりの意志と行動が大きな成果につながるものです。

人の一生は、おおよそ 80 年、誕生してから 20 歳前後まで、私達は社会に適応する為の教育を受け、その後、社会人として就業する事を必然として受け止めてきました。

人としてこの世に生まれ、社会人として、より良く、より豊かに生きる為には、それぞれが自らの生き甲斐や価値観に照らして職業や職場を選択し、愉しみや喜びを持って働く事が生涯で最も重要なテーマである事を認識しなければなりません。

幸いにして、人間には「想像力」という、かけがえのない能力が与えられています。そして、その想像力を使って、思い、考えた事を形にする為の「行動」の源泉である「気力」と「時間」、さらにその過程を味わう「感性」が備わっています。

人の一生は日々の意識の総和です。

日々の仕事の総和である、とも言えます。

シンケンは、「人が楽しく豊かに生きる為の心地いい居場所と暮らし」を創造し提供する組織です。そしてそこで営まれる暮らしを見守り、サポートし続ける組織でもあります。この組織の中で、それぞれが自らの価値ある目標を見出し、その実現の為に、与えられた能力を十分に活用し、自らの成長と達成への過程を愉しむ事こそ、シンケン社員としての務めです。

人は皆、人に喜びを与え、人に好かれる事を喜びとし、誇りを持って生きています。その喜びや誇りの濃淡がおおよそ、それぞれの幸福の度合いと直結している様に思われます。

私達の企業は、この事を良く理解し、信実を求め、信義をつくし、信用信頼に研きをかけ、互いに研鑽を重ねる、「信の醸成」に意を注ぐ人達の集合体であり、その一人一人の人生を支え合う為に存在する組織です。

「悠悠と綿綿と在るために」・・・

2000年